馬場綾香

・研究内容
伝承文学・神話学。19 世紀ドイツ語圏の「神話学派」を中心とした学史研究。

・紹介する本
１．吉田孝夫『語りべのドイツ児童文学　O.　プロイスラーを読む』かもがわ出版、2013 年
　「物語ること」の力、特に児童文学のもたらす「生きる力」について、オットー・プロイスラーの『大どろぼうホッツェンプロッツ』『クラバート』の分析から、両作品へのドイツ社会における反響という観点も交えつつ論じる。本を青少年に提供する立場として、むしろ大人こそこういった書を通して考えるべきなのかも知れない。

２．河野眞『ドイツ民俗学とナチズム』創土社、2005 年
　戦中・戦後のドイツ民俗学界には如何なる議論があり、それが如何にして政治的・社会的問題と結びついたか。本書では資料を丹念に追い、著者一流の深い洞察によって論争の経緯や鍵概念の孕む問題点を紐解く。過去の問題を洗い出すことで「民俗学」Volkskunde という学問の現在・未来をも問い直すことにつながる名著である。

３．佐々木高弘『シリーズ妖怪文化の民俗地理１　民話の地理学』古今書院、2014 年
　地域社会が共有する文脈を知ることではじめて、ローカルな伝承が当該コミュニティ内部において有する／有していた意味を精確に分析できる。本書はクビナシウマなどの具体的事例を基に、民話のそうしたローカルな意味に踏み込む考察を重ねる。一般化や抽象概念だけでは論じることのできない有意義な視点である。